

【家路】 いへぢ

「家路」という言葉に私はあの曲・あの頃を思い出さずにはられません。
私が通った中学校の下校の音楽がドヴォルザーク作曲交響曲第九番『新世界より』第二楽章だったのです。

この楽章には後に「家路」という題と歌詞が堀内敬三によって付けられ、日本では交響曲から独立して知られるようになりました。

放課後、校庭で球技をしていた私を家路に着かしたのはこの第二楽章でした。校庭の傍らに放り出した学生服と鞆を拾い上げ、砂ぼこりを掃いながら、友人と下校する私を見送るようにこの曲が流れていたものです。

今回この稿を書くにあたり、CDを購入し久々にじっくり聴き直してみました。カラヤン+ベルリンフィルという当時の定番です。

私はこの曲を聴くと広大な大地の夕暮の情景を連想します。

この曲が下校の場面と結びついているためなのでしょうか。それともドヴォルザーク自身そのようなイメージで作曲したのでしょうか。

ドヴォルザーク(1841~1904)はチェコ出身の作曲家。モネやセザンヌなど印象派の画家たちとほぼ同世代になります。

1892年、彼はニューヨーク・ナショナル音楽院から破格の待遇で迎えられ渡米しました。彼は封建的伝統のない自由な社会に衝撃を受けたようです。

52歳でこの曲を書き、1893年カーネギーホールで初演、好評を得ました。

「新世界より」とは合衆国のことであるのは言うまでもありません。

晩年、ドヴォルザーク自身がアメリカの黒人音楽が故郷ボヘミアの音楽に似ていることに刺激を受けたと語っています。アメリカ民謡・黒人霊歌に対する関心が強かったようです。

具体的に交響曲第九番と黒人霊歌との影響関係を指摘する評論家もいるようです。しかし、ドヴォルザーク自身はアメリカ民謡の精神を汲んで作曲しただけだと語っています。

黒人霊歌の影響に関しては私にはわかりませんが、少なくとも第二楽章は同じチェコ出身のスメタナのモルダウに共通した牧歌的な趣が溢れているように素人(しろうと)ながら感じています。総じて曲の印象は分かりやすく、誰にも親しみやすいのではないのでしょうか。

1894年ドヴォルザークはアメリカを去りチェコに戻ります。ホームシックにかかったと聞いたことがあります。もし本当なら後に日本で付けられた「家路」という曲名は偶然にも彼の人生と重なりますね。

【今、私はこの曲を聴きながら拙稿を読み返し、この蛇足を挿入しています。第二楽章は今終わりに近づいています。この郷愁を誘う旋律に対し動揺を鎮める術を知らずに聴き入っています。柄にもなく感傷的にならざるをえない自分がいます。この楽章の趣には懐かしさを覚えてやみません。

弦楽器が一つ、また一つ少なくなっていく。今尽きようとする第二楽章はやはり夕暮を想わ

ずにはられません】

さて、私は竹茶杓に「家路」という銘をつけ今月末の茶会に備えています。

茶杓に銘を付けるなど茶匠か高僧の業で、ひよっ子茶人がすることではないという意見も承知しています。しかし、どうしても使いたい竹があり初めて銘を付けるに至りました。

竹は私が指導している児童自立支援施設の竹林から採ったものです。指導の助手をして下さっているML会員の某氏が削ってくれました。施設からは持ち出さず、卒業茶会だけに使うこととし銘を付けました。

さて、3月は卒業茶会の月、この茶杓はそれぞれの若者の想いと家族の新たな門出に立ち会うことになるはずです。

この銘に対する私の想いは『折々の銘 16・17』桜川を参照して戴ければお察しいただけることでしょう。

広大な敷地の施設にて、家路に着く親子を見送る曲が必要ならば、ドヴォルザークの交響曲第九番第二楽章をおいて他にはないでしょう。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

~ Copyright (C) 2011 ~私の書齋~ 森田文康. All Rights Reserved.~